

相手を知ろうとする心

立山町立雄山中学校 3年 鶴飼真平

総合的な学習の時間、日本のSDGsの目標達成度の報告書の資料を見て、僕は不思議に思った。17の目標ごとに4段階で評価し、「重大な課題がある」のオレンジ、「深刻な課題がある」の赤でいっぱいだった。どうしてだろう。僕は小学生のときから6年間、自由研究で立山町のまちづくりや自然環境について調べてきた。教育や健康、僕のくらしは多くの人の手で時間をかけて大切に守られていると分かった。テレビ番組やCMでも呼びかけられ、いろいろな団体や企業が全ての人が働きやすい環境づくり、発展途上国への寄付等、たくさん取り組んでいるのに。まだそんなに足りないのか。

そんな時、母が「先進国の送った衣類が途上国の負担になっているらしいよ」と言った。僕が新たに会った問題は思いつきもしないものだった。途上国に送ったまだ着られる大量の衣類が、地元の衣料産業を圧迫し、働く機会を失わせたり、廃棄物の処理を引き受ける国で、日本のようなごみ処理場のない国では、ごみが山のように積もり、環境問題を引き起こしたりするようだ。衝撃的だった。相手のために思っていたことが逆に問題になってしまうなんて。受け入れる国は「もう大丈夫ですよ」とか「これ以上は無理です」とは言えなかったのだろうか。そもそも意見を述べる機会がなかったのだろうか。善意は害になることもあるのだ。先進国の豊かさが、途上国が発展できない問題につながっている。

相手は何が必要か、どう考えているのか。知るためには話し合うことが必要だ。僕は部活動の練習試合で、他校の生徒とチームを組むことが多い。まずは「一日よろしくお願ひします」、そして少し勇気を出して「今の試合、どうだった?」「次の対戦はこうしよう」、最後には「ありがとうございました」と会話を重ねることで、初めて会った人ともチームになることができる。話すこと、それは相手を知る第一歩。相手と分かり合う第一歩。自分の思いを伝えず、相手の考えを知ろうとせず、理解し合えないチームで勝つことはできない。目標を達成するためのパートナーシップとは、分かり合おうとする心や相手の立場への思いやりがあってこそ強くなるものであり、対等に協力する関係であるからこそ一緒に課題が解決できるのだと思う。

僕は、ごみを出さない生活はできない。フリーマーケットのように自分にとっていらぬものが、他の誰かにとっては必要なものになることはある。でも、自分にとってのごみは、相手にとってもごみかもしれない。今の自分にできることをする。本当に必要な支援をする。できることが増えた相手に、次に求められていることを知る。すべての人に、すべての人で、というのは本当に難しいけれど、様々な分野にまたがる課題を解決し、誰もが幸せな未来へつなげるために、相手の幸せを想像し、分かり合うための話し合いを大事にしていきたい。